

2010年号

青峰同窓会会報



会長挨拶

青峰同窓会会長
小手川 智(42C卒)



同窓会会員の皆様にはお変わりなくご健勝のこととお喜び申し上げます。今年も暑い夏となりました。なんと猛暑日の多かったことでしょうか。異常気象と言われて数年が経ちますがこの様に毎年続くところが普通と感じるようになるから不思議です。熱中症で倒れる人が多発しました。日本は温暖地帯から亜熱帯に変わりつつあるのではないかと言う人がいますが、「同感！」と言いたくなるような今夏でした。平均気温の100年に亘る観測によればこの100年で0.74℃の上昇であったと発表されています。この程度の値で地球温暖化が進み、さらに異常気象になるというのは驚きです。温暖化は化石燃料によるCO₂の大量発生に起因すると言われていています。私たち一人一人が心がけなければと改めて思い知らされます。他方、日本の政治経済は依然として混沌としています。とくに経済では明るい兆しの見えない不安定な状況下にあります。私たちにとって厳しい環

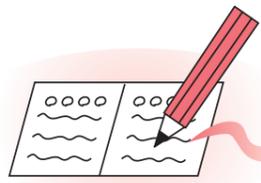
境が続きそうです。どうか皆さん頑張って乗り越えて下さい。

さて、再来年(平成24年)に鈴鹿高専は創立50周年を迎えます。これを機に同窓会の運営を活性化したいとの期待を持っています。このためにホームページを開設して、会員相互の情報交換が容易に出来るようにしたいと検討しております。同窓会員、退官教職員を含めたコミュニティーになれば幸いと思っています。

来る創立50周年記念事業には同窓会の役割が大きなものになると考えております。50周年の節目にふさわしい事業にするため、母校に対して出来る限りの協力をしたいと思っております。あらためて50周年記念事業についてご支援、ご協力をお願いすることになりますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。

contents

| | |
|---|---|
| 会長挨拶…………… 1 | 退職教職員…………… 9 |
| 卒業生便り…………… 2 | <ul style="list-style-type: none"> ■富澤 好太郎 (生物応用化学科) ■鈴木 昭二 (電気電子工学科) ■國枝 義彦 (材料工学科) ■伊藤 保之 (電気電子工学科) ■大谷 佳範 (学生課) |
| <ul style="list-style-type: none"> ■俳句のお陰様で元気にしています 南井 剛 (h04E卒) ■二足のわらじで頑張っています 伊木 航 (h201卒) | 転出教員……………14 |
| 学科近況…………… 4 | <ul style="list-style-type: none"> ■齊藤 正美 (副校長・電子情報工学科) ■岩田 政司 (生物応用化学科) ■齊藤 園子 (教養教育科) |
| | 長瀬先生の訃報に接して…………… 16 |



卒業生便り

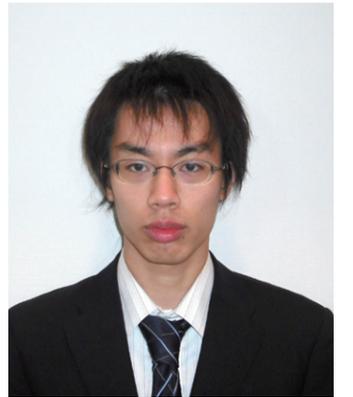
俳句のお陰様で元気にしています

南井 剛 (h04E卒)
俳句結社「花藻」所属 準同人

鰯雲少年野球始まりぬ
 手花火の少女の瞳輝けり
 燕の子産まれ家族に輪の戻る
 ジーンズのまま花人となりけり
 モーツァルトの抑揚が好き春の蝶
 秘め事は扇子の中にたたみけり
 青空をつかむ少年捕虫網
 青年の素直な返事青田風
 告白の少女の鼓動バレンタイン
 人日や人の心に裏表
 春霞満開といふ汚れかな(観桜句会 海津大崎にて)
 射抜く音深閑と鳴り弓始
 一粒に光詰まりし葡萄かな
 青空を水飲む如く鯉鱈
 柿二つ供え子規へも手を合わせ
 人生に勝ち負けはなし蝸牛
 緑陰に指匠なる手話の人
 満月に「かぐや」は姫を探索中
 懐妊のニュース流れて水温む(紀子様御懐妊を祝して)
 ひらがなで鳴いているらし虫の声
 髪少し切るもひとつの更衣
 下萌ゆる丘に大志を抱き立つ
 メール打つ指先硬き冬の駅
 サングラスサザンの曲が流れ来る

二足のわらじで頑張っています

伊木 航 (h201卒)



卒業生の皆様、如何お過ごしでしょうか。h201 卒業生の伊木と申します。卒業後は内定をいただいた企業に勤めており、現在は社会人と兼ねながら鈴鹿高専の研究生として在籍しております。研究生としての活動の中でこの原稿執筆の機会をいただきましたので、近況の報告をさせていただきたいと思っております。

鈴鹿高専卒業から現在までの2年間、私はプログラマーとして様々なシステム開発の仕事に携わり、中には病院の電子カルテシステムや駅売店の販売管理・経理システムなどの大規模なシステム開発の要員の一人として参加することもできました。最近では、今までの業務実績を基にシステムの設計やプロジェクトの管理など、比較的重要な位置づけを任せられるようにも成長し、高く評価をいただいております。その一方で、進学を選んだ方にとって2年間というのは新たな進路変更の時期でもあって、私の同級生からは企業への就職、大学院への進学など様々な連絡がありました。同じ場所にいた人間がそれぞれの進路へと進んでいくのは何か感慨深いものがありました。私が就職を選んだということもあって、着実に変わっていきながら進んでいく姿というものは少しばかり羨ましく思いました。

進学した人が大きく変化をしようとしているのを見習い、私は自己啓発の意味も込めて鈴鹿高専の研究生となることを決意しました。在学時にお世話になった電子情報工学科の先生方を訪ねて情報収集を行い、厳しいながらも親身になって対応していただきました。そのおかげもあって、この7月から無事に研究生として在籍することとなり、現在は研究の指導をいただいております。同級生にこの内容を報告すると、学生、社会人の両方から「色々大変ではないか」ということをよく言われた

り驚かれたりもしているのですが、自分の変化については喜んでくれているようです。自分としても、社会人と兼ねながらの為に両立が難しかったり、まだ実際に大きな進展はあるわけではないのですが、今はかなり充実した生活が送れています。研究生として入学することを思い立っていなければ、いつかは恐らく後悔していたのではないかと感じています。

同級生がどのような道を進み、どう変化していったかを知ることが私にとっての卒業生としての一番の楽しみとなっています。また、卒業生にとって大切なことは、同窓生がそれぞれ自分の納得できる道へと進んでいけるということ、自分自身が自己実現の為に変化することができるということではないかと考えています。私自身も、この研究生としての経験によって大きく変化できること、またその成果が今後によく活かして、最終的に満足することができることを目標に、研究生としての活動に力を入れていきたいと思っております。この内容が少しでも読んでいただいた皆様方のお役に立つことができれば幸いです。拙文にお付き合ひくださいませ、本当にありがとうございました。

卒業生の皆様の進まれた道が、充実したものとなることを期待しております。



学科近況

教養教育科の近況

奥 貞二 (45C卒)

今年は大きな変化がありました。まず、40年間金属工学科の助手に始まり、最後は教養教育の物理の先生をされた大矢弘男先生が、去年の7月がんの疑いがあると入院され、とうとう9月名大付属病院で逝去され、帰らぬ人となりました。大矢先生自身「こんなはずではない。もう一度鈴鹿の地に立ちたい。」とお思いだったと思います。昨日まで一緒に話し、将来の鈴鹿高専の未来を見つめておられ、しかも、女子学生に絶大の人氣があり、人一倍健康に留意されていたあの大矢先生が、いなくなってしまいました。思い出せば筆が進まなくなる心境です。ご冥福をお祈りします。ところで、その後任にこの4月から、物理の先生として三浦洋子先生が着任されました。三浦先生は「三角スピントロニクスにおける新奇な磁気状態の解明」といった研究をされていて、2007年には口リアル・ユネスコ女性科学者 日本奨励賞を受賞しています。学生への刺激、物理学の興味、厳しさをご教授いただければと思っています。

もう1人、英語の齋藤園子先生が、3月で急遽北九州市立大学へ栄転されました。7年間でしたが、大石先生に代わって尽力いただきました。4月着任されたのが、松尾江津子先生

です。松尾先生はシェクスピアがご専門で、御茶ノ水大学大学院で研究されながら、都内の大学で非常勤をされていました。先生と劇の話をしていただけたら、別人のように目が輝いてきますよ。そして、この4月から材料工学科にイラン人のファルジャミ先生が着任され、全部で女性教員が7人になりました。高等教育機関で女性教員が占める比率は、上位になると思います。新しい風を吹かしてもらいたいです。加えて、電子情報の齋藤正美先生が米子高専校長に、化学工学の岩田教授が大阪市立大学に栄転され、本当に移動の多い年でした。これにより、すっかり鈴鹿高専のメンバーが入れ替わった感じです。初代木村校長を知る人、二代目矢野校長を知る人は、すっかり少なくなりました。

学科主任は物理の土田先生、人文社会の責任者は小倉先生(歴史)に変わりました。ちなみに小倉先生は、この4月教授に昇任されました。後は、理科は大矢先生に変わって、田村教授、数学は安富教授、英語は中井教授、体育は細野教授です。教養教育はスクラムを組んで、難局を乗り切っていく所存です。

機械工学科の近況

藤松 孝裕 (62M卒)

機械工学科および本校の卒業生の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお喜び申し上げます。さて、本年度も機械工学科の近況を報告せよとのことなので、例年と同じように簡単に紹介させていただきます。

機械工学科での人事異動ですが、21年度におきましては打田 元美 教授が退職されました。後任としては、制御系が専門(情報工学)である打田 正樹 助教(前 福井工大)が本年4月より教鞭をとられており、機械工学科の守備範囲が一段と広がったように思います。本年も各先生方に近況・皆様へのメッセージをいただきましたので、紹介させていただきます。

富岡: 皆さんお元気ですか? 来年3月には定年を迎えますが、今度は別のスイッチが入りそうです。人生70歳までと思っておりますので時間不足にならないように頑張りたいと思います。…趣味は変わらずアマチュア無線ですが。

埜: 研究主事(校長補佐)を務めて2年目になり、産学連携や知的財産等の校務に忙しくしています。自動車部の顧問を担当しており、今年の鈴鹿サーキットでの低燃費競

技大会で準優勝(大学・高専等クラス)し、その勢いで全国大会(ツインリンクもてぎ)に挑戦します。

佐藤: 学科長2年目となりました。就職に関する進路指導は、不況のあおりで多少苦戦しましたが、夏休み前には希望者全員内々定をとることができて、ホッとしております。仕事上のことなど、ご相談があればお立ち寄りください。

末次: 本年度も、合計8名の学生諸君(5年生5名、専攻科1年生3名)で、研究室はいつもにぎわっています。今年の連中たちは、お互い仲良しらしく、今のところ喧嘩も無く、一安心です…。

近藤: 今年も専攻科電子機械工学専攻主任を務めています。機械科棟は古いままですが、専攻科の予算で創造工学演習室のパソコン(6台)を更新しました。SolidWorks SimulationによるCAE解析が可能です。

民秋: 今年も4年生の担任をしています。創造工学、インターンシップ、体育祭、高専祭、工場見学と、多くのイベントがある1年を学生と一緒に楽しみながら過ごしていきたいと考えています。

藤松: 寮務主事補が6年目になりますが、今年は担任もなく、自己点検書も一休みということもあり、穏やかな一年になることを期待している今日この頃。

白井: 今年から電動バイク関係の研究プロジェクトを開始、極秘プロジェクトも水面下で進行中。Suzukaブランドを生かしたネタで今年も攻めます! fs_moodle はベクターアワード2009で部門6位の成績を収めました。

白木原: 既に2度目の担任業務進行中。学内最大学生数(49名)のクラスと向き合い、日々格闘中ですが、その分問題も???…簡単じゃないだろうな…きっと。

打田: 今年度、着任しました打田でございます。5年生の担任をしております。また、ロボ研、サッカー部を担当しております。高専の教員は初めてであり、いろいろと勉強中です。今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

電気電子工学科 北村 登 (47E卒)

電気電子工学科棟は昨年8月からの耐震工事が年度末に終わり、4月から新しくなった実験室で学生実験などを行っています。外観は色がクリーム色になった程度ですが、内部はずいぶんと変わりました。学内で始めてエレベータも設置されました。是非お立ち寄り下さい。(その時の楽しみのために、今回は写真は載せないことにします。)また、別の記事にありますように伊藤保之先生と鈴木昭二先生が定年退職されました。伊藤先生は週3日は授業や実験に来ていただいています。鈴木先生は残念ながら定年を目前に倒れられ、現在も入院中です。中野先生も3月で退職されました。

私は今年度は入試対策の取りまとめをしております。中学生向けの説明会も10月の高専祭の時の1回を残すのみとなりましたが、これから中学校での進路指導が本格的に始まりますので、皆さんの周りの中学生に鈴鹿高専の受験を是非勧めただければと思っております。

近藤一之: 卒業生の皆様、ご無沙汰しています。今年の夏は大変暑い日が続きましたが、皆様いかがお過ごしでしたでしょうか? 家庭菜園のゴーヤーがたくさん収穫できました。あの苦みを毎日のように楽しんでいます。お陰様で体調も良好です。ただ細かな文字が若干見にくくなり、気持ちは若いままですが、年齢は確実に増えているのだと自覚している今日この頃です。皆様お元気でご活躍ください。

花井孝明: 鈴鹿高専に赴任して10年目の節目を迎えました。研究室では、電子顕微鏡の性能向上に関する研究を引き続き行っており、今年も4名の専攻科生の手を借りて研究を進めています。校務では、専攻科長を務めて4年目を迎え、国際的に通用する技術者の育成を目指した専攻科の運営に努めています。ロボコンも引き続き担当しており、今年こそ全国大会に進出できるよう頑張っています。

大津孝佳: 4月より電気電子工学科教授に就任致しました大津です。1985年に(株)日立製作所に入社して以来、25年間、ハードディスク用の磁気ヘッドの研究・開発・設計・量産に従事してきました。企業での採用面接官や知財活動も含め、これまでの経験と、スマートグリッド等次世代電子デバイスの静電気破壊に関する研究を通じて、未来を担うサイエンススペースのエンジニアの育成に携わって

行く所存です。是非、宜しくお願い致します。



■大津先生(前列左から1人目)・辻先生(前列左から2人目) 歓迎会

川口雅司: 今年度は情報処理センター長および国際交流分科会委員長などの仕事をさせて頂いております。7月には交流協定を締結している中国常州の職業技術学院より4名の先生方と10名の学生さんが来校され、1週間滞在されました。海外勤務を経験される卒業生の方も多いと思いますが、健康および安全に気を付けられて益々の御活躍をされますようお願い申し上げます。

辻琢人: 本年4月に電気電子工学科に着任した辻琢人です。前任の詫間電波高専、及び豊橋技術科学大学では、半導体薄膜の結晶成長を研究課題と取り組んできました。鈴鹿高専でもこれまで自作してきた装置を使って、学生とともに引き続き取り組んでいきたいと思っておりますので、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

西村一寛: 今年で赴任して5年目となり、同じ年度に入学した5年生のクラス担任を昨年度に引き続き任されています。長いようであつという間の5年目で、この期間を共に過ごしてきた5年生の担任をするという縁もあり、クラス全員立派に成長して卒業して欲しいという思いで奮闘しております。教職員の皆様にも色々助けてもらい、充実した日々を過ごしております。

柴垣寛治: この1年間は公私ともにいろいろな出来事がありました。嬉しいこともそうでないこともありましたが、これからも毎日が勉強だと思って頑張っていこうと思います。電気電子工学科棟が改修で綺麗になり、実験設備も充実してきたところですので、高専の近くへお越しの際は、是非お立

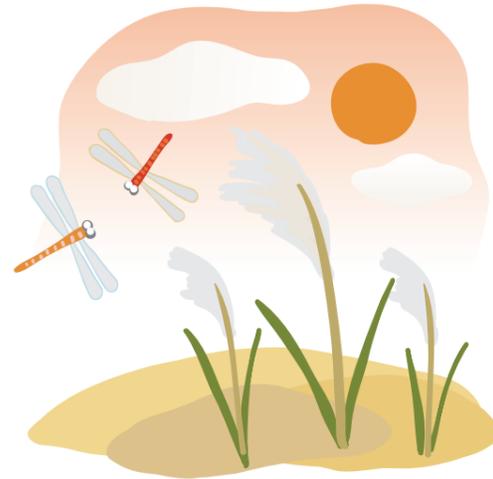
ち寄りいただければと思います。

奥野正明：卒業生の皆様、お元気に仕事、学業に励んで見えることと思います。最近の言葉で「100年に一度の…」、「あつてはならないことが…」、「何十年続いた…が崩壊！」。(今年の夏は、ついに天候までも観測史上、例のない猛暑)。社会の激動から見たら、電気科棟の改修による様変わり、数名の教員の変動も「若干」の範囲でしょうか。私の方はおかげさまで体調も回復し、バドミントンの全国高専大会をこの8月、地元鈴鹿で開催することができました。多くの卒業生にお世話になり、ありがとうございました。まだまだ政治、経済の混迷、低迷は続きそうですね。体調に気をつけ、何事もプラス思考で頑張ってください。

鈴木昌一：私も今年で40歳を迎え、だんだんと体に疲れが貯まるようになってきました。しかし、仕事は実験を始め、ソーラーカー、研究会や学会の発表とだんだんと忙しくなっている感じがします。卒業生の皆様には、仕事でいろいろとご面倒を掛けるかもしれませんがよろしくお願ひします。

山田太：電気電子工学科の改修工事が終わり、引っ越しの荷

物の整理をしておりましたら、鈴鹿高専へ採用当時の写真ができてきました。若くて元気な自分がありました。今年で17年目、写真の自分から元気をもらい、記録的猛暑を乗り切ることができました。



電子情報工学科の近況

卒業生の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。平成元年に電子情報工学科が設置され22年目を迎えた今年、初めて電子情報工学科の卒業生がこの記事を担当させていただくこととなりました。昨年度の同窓会報で赴任することが紹介されていた私が、今こうしてこの記事を担当しているのはいささか奇妙な感じも致しますが、教職員や学生さんの近況報告などをお伝えさせていただきます。

●齊藤正美先生が異動

本学科で長年、電子機器学や人工知能の講義を担当していただいております齊藤正美先生が平成22年4月1日に米子工業高等専門学校へ異動となりました。現在は、米子工業高等専門学校の学校長としてご活躍されております。制御を専門とされている後任の先生が10月より赴任される予定となっております。

●森育子先生が在外研究員に

森育子先生が、平成21年3月より1年間ドイツのハノーヴァー大学に研究員として長期出張されています。先日日本で行われる国際会議のため一時帰国されましたが、大変充実した環境で研究活動に取り組まれているとのことでした。より一層パワーアップされた森先生が帰ってこられるのを教職員、学生一同心待ちにしております。

●今年度の進路状況について

ここ数年同様、今年度も大変厳しい就職戦線となっておりますが、より高い目標を持って現在も就職活動、受験に取り組んでいる学生さんを除いて、今年度も就職希望、進学希望の全員が内定、合格を頂くことができました。就職では、

浦尾 彰 (h13I卒)

大学生と同様の試験体系を採用する企業が増えており、進学においても、推薦入学の募集人数を増加させている学校が増えてきました。毎年のことではありますが、進路に悩む学生が多く存在しております。卒業生の皆さまの生の声をぜひ届けていただけたらと思います。

●プログラミングコンテストで活躍

昨年度のプログラミングコンテストにおいて、課題部門で優秀賞、自由部門で敢闘賞、競技部門で特別賞と全ての部門において賞を頂くことができました。課題部門、自由部門の作品は学校説明会、オープンキャンパス等で展示しておりますので、ご覧頂けたらと思います。また、昨年度に続いて、5I 高木君、鷹野君、矢野君のチームが ACM-ICPC (国際大学対抗プログラミングコンテスト) の国内予選を突破し、アジア地区予選 (12月11日~12日) へ進出することとなりました。



■今年度のものづくり体験教室の様相
赤外線とマイコンを使って模型自動車を動かす赤外線リモコンを製作し、マイコンやプログラムがどのように関わっているかについて学習しました。写真は自作のリモコンを作成している様子です。

生物応用化学学科の近況

卒業生の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお喜び申し上げます。昨年度、岩田先生、中山先生が転出され、本年度より山口先生をお迎えしました。以下、11名の教員からの近況報告を紹介させていただきます。

杉山利章教授 本校に着任してからの30有余年、オイルショック、円高不況、バブル景気後の失われた10年、そして世界同時不況など幾多の波が押し寄せてきました。更に大きな波にも、それを乗り越えていこうとする卒業生の皆さんの熱い情熱に期待しています。

内藤幸雄教授 今年度で赴任15年目です。研究はシステムSと血糖抑制物質を継続しています。創造工学はセルロースの糖化を行っています。座学の方は、生物化学、生物機能工学、遺伝子工学と分子生命科学を担当しています。

生貝初教授 本年より学科長をしております。先年のリーマン・ショックにより高専生の就職戦線は非常に厳しい状況下にあります。このため大学編入学に変更する学生が全国的に増加し、進学の方もかなり狭き門になっています。しかしながら、日頃努力している学生は希望の企業や大学から内々定や入学許可をいただいているのも事実です。学生にこのことをしっかりと伝え、自己研鑽を積むよう指導するとともに、我々も創造性豊かな実践的技術者の育成に努めていく所存でございます。

澤田善秋教授 (50C卒) 赴任後7年目を迎え、残り7年となりました。本年度は岩田先生が大阪府立大学へ転出されたので、化学工学系教員は私一人となりました。後任を公募中ですので、お知り合いの方で、適任者がおられればご推薦下さい。高専の実情を良くご存知の方が望ましいです。

長原滋教授 (52C卒) 全国高専体育大会バドミントン競技を8月に本校で開催するため、その準備の真最中です。校務では前任の岩田先生 (S50C卒) がご栄転されたため、

下野 晃 (工業化学科58年卒)

JABEEプログラム責任者を引受けることになりました。

下野晃准教授 (58C卒) 本年度SHTN (鈴鹿高専ヒューマン&テクノロジーネットワーク) の世話役を担当しています。活性化のためにこれまでの活動を一新し、同窓会と共同で在校生、卒業生、教職員の皆さんが積極的に参加・交流が出来るようなホームページを作成しようと思っています。

山本智代准教授 赴任4年目、まだまだ学生と一緒に成長中。課外活動ではハンド部とソフトボール同好会の担当をしています。今年ハンド部は昭和47年以来の東海地区優勝を果たし全国大会に出場します。OBの皆様、更なるご指導・応援宜しくお願いします。

高倉克人准教授 赴任6年目となる今年度は、5年生の担任を持っております。学生たちが高専生活を良い形で締めくくり、新天地に巣立つための一助となれるよう頑張りたいと思います。研究については、新規な両親媒性化合物を合成し、それらが起こす動的挙動について調べております。

山口雅裕講師 今年4月に着任し、4ヶ月が経とうとしています。研究テーマは両生類の変態機構の解析で、少しずつ実験室をセットアップし、オタマジャクシも飼いはじめました。授業、実習、定期試験など、大変ですが新鮮な毎日です。

淀谷真也講師 赴任8年目になりました。ポチポチ赴任何年目って数えることがどうでもよくなりました。現在、4Cの担任です。卒研生は学科生が4人、男子バレー部は部員19人どちらも良い学生に恵まれ楽しくやっています。

小川亜希子助教 こんにちは、小川亜希子です。鈴鹿高専に来て4年目に突入しました。今年は3年生の担任を受け持っています。毎日が運動会のように感じていますが、今年は彼らと一緒に成長していきたいな、と気持ちを新たに教育研究に取り組んでいきます。

材料工学科の近況

黒田 大介 (h05S卒)

井上先生 (S46H卒)：寮務主事2年目になります。学生の要望を取り入れて学寮の生活環境を積極的に改善しています。研究面では、マイクロバブル (MB) に関する研究課題に取り組み始めています。是非、学校に足を運んで近況を知らせて下さい。

江崎先生 (S52H卒)：平成22年度より外渉担当主事 (校長補佐) として学校の運営をサポートしております。今年も5年生の就職を担当しました。昨今の経済状況は就職戦線にも大打撃を与えておりますが、何とか材料工学卒業予定者全員の進路が決定しました。時間がありませんのでお立ち寄り頂き、皆さんのお勤め先の採用情報等を教えて頂ければ助かります。

兼松先生：材料工学科における様々な教育研究活動に加えて、本年度は材料工学科長としても忙しい毎日をご過ごしています。校長補佐に昇格された江崎前学科長とタッグを組んで、5年生の就職、編入のお世話などをしてありますが、材料工学科の教員団はアクティビティが高く、結束力が高いので、そんな構成員に助けられての毎日を送っています。卒業生諸氏におかれましては、是非またお立ち寄りいただき、ご活躍の状況などお聞かせいただければと願っています。

宗内先生：今年度も3年生の熱力学と5年生の授業を担当しています。研究は、自分の専門分野である燃料電池と2年前から始めたオゾンの生成の研究を行っています。燃料電池では、三重

県の補助事業に参加して電極関係の研究を行っています。何か三重県にも燃料電池で貢献できたらと考えています。鈴鹿に来る前は長く企業にいたので、会社での困ったことや人間関係の面で問題がありましたら、気楽に遊びに来てください。

小林先生：教務主事補、バスケットボール部顧問などを担当しています。PVD法による耐食皮膜の製造、金属間化合物の単結晶育成などを研究しています。近くに来られましたら、遊びに来てください。

下古谷先生：赴任して18年が経過しようとしています。校務では、学生主事補と専攻科副主任を担当しています。また、交通部会長として学生指導に微力ながら指導する立場となっております。一方、研究面ではマイクロ波を利用した廃棄系バイオマスの有効利用に関する研究を行っています。最近の学生は、卒業研究の時間以外はほとんど研究室に顔を出さなくなっており、昔の学生が一生懸命卒業研究に取り組んでいた姿が懐かしく感じる今日この頃です。

南部先生：電子顕微鏡のリニューアルを担当し、既存のFE-SEMに液体窒素素レスEDXとEBSDのユニットを設置しました。また、EDX/EBSD試料作製用に、フラットイオンミリング装置と断面イオンミリング装置を増設しました。さらに、顕微レーザーマン分光分析装置を名古屋大学より移設しました。材料分析関係の共同利用設備がより充実しましたので、ぜひご利用ください。

教育研究支援室の近況

卒業生の皆様方におかれましては、各方面でのご活躍のこととお喜び申し上げます。平成19年4月1日に教育研究支援室が発足してから、早いものでもう3年目を迎えることとなりました。総勢15名(内、3名女性)のスタッフで、すばり組織名称の通り「教育研究支援活動」に毎日全力であたっております。

現在本校の女性比率はおよそ2割であり、生物応用化学科(旧工業化学科)におきましては、半数以上を女子学生が占める現状であります。実はこの教育研究支援室発足の平成19年度に鈴鹿高専は4名の女性理系教員を採用し、平成20年度には文部科学省の「女子中高生の理系進路選択支援事業」の採択を受け、「続け、理系の卵たち！ 描け、貴方の未来予想図！」と題した女子中学生および本校の女子学生の進路選択支援を行いました。今年度もあらたな女性教職員の方々を迎え、こういった進路選択支援活動にも参画していく次第であります。

また、各種プロジェクト(ロボコン、ソーラーカーなど)、産学連携事業、ものづくり体験教室等にも積極的に参画しております。卒業生の皆様方、近くへお越しの際は、ぜひ本校にもお立ち寄りいただき、ご指導ご鞭撻いただけると幸いです。皆様のご活躍を願っております。

和田先生：今年度も、無機化学、材料物理化学および固体物性の授業を担当し、専門基礎の分かる学生を社会に送り込めるように努力しております。また、研究室では、光機能材料となるガラスやセラミックスを中心に研究を進め、分光分析技術も分かる学生を育てています。

黒田 (h05S卒)：平成22年3月31日に国枝先生が退職されました。国枝先生は本年度も非常勤として引き続き無機材料の講義をご担当されています。私は赴任5年目になりました。

万谷先生：鈴鹿高専に赴任して3年目になりました。本年度は3Sの担任を初めて担当しています。また、現在卒業研究生が3名配属されており、研究室の環境を整えながら、チタン合金の機能性向上に関する研究に取り組んでいます。

サハ先生：平成22年4月1日付けで材料工学科に赴任いたしました Farjami Sahar と申します。材料工学実験と5年生の工業英語を担当しています。磁場を利用した金属材料の組織制御について研究しています。

猿渡技術職員：早くも12年目になります。現在は主に学生実験と創造工学を担当しております。体力の衰えを痛感する今日この頃です。

宮崎技術職員 (h14S卒)：早いもので赴任5年目を迎えました。材料工学科各学年の学生実験を担当しています。個性あふれる学生達とともに、元気に実験を行っています。卒業生の皆様、機会がありましたらぜひお立ち寄り下さい。

宮崎 みよ (h14S卒)

写真は、教育研究支援室の参画した『女子中高生の理系進路選択支援事業』の一コマです。



退職教職員

「鈴風」より転載

振り返ってみると ー裏話ー 生物応用化学科 富澤好太郎



昭和62年4月に本校一般科目理科に採用され、63年4月に工業化学科に配置換えとなり、平成9年から生物応用化学科の一員として今日を迎えました。赴任当時はバイオテクノロジーという言葉が流行しており、工業化学科に配置換えになると、時代のニーズに合うようにと工業化学科の改組に取り組み、平成元年度の沼津高専と富山高専の学科改組に続けと努力しましたが、平成2年の要求は認められませんでした。

次年度こそはと思っていたのですが、専攻科設置の話が持ち上がり、今度は専攻科の設置目的やカリキュラムの編成の一員として参加しました。平成5年度に専攻科の設置が認められた後の本学科の改組要求はなかなか認められず、結局本校は高専の化学系学科の中で最後の改組となりました。

学科名称についても種々検討しましたが、材料工学科のある新居浜高専、久留米高専と本校は他校で共通名称になっている「物質工学科」という科名は紛らわしいということから認められず、現在の科名とは違った名前を申請していました。平成8年度に新居浜高専が「生物応用化学科」という学科名で改組が認められたことから、同じ経過を辿っていた久留米高専と本校の学科名は自動的に「生物応用化学科」となりました。本校にとってこの思案外の意外な学科名が良かったのか時代のニーズにマッチしたのかは分かりませんが、改組前の本学科の人気は最低に近い状況にあったのですが、今では人気の高いほうの学科に入ったように思います。

改組に伴い3年後の平成11年度には生物コースの建屋が認められました。その年の夏休みには教室棟の狭隘化の解消と耐震のための改修があり、後期には工業化学科棟の改修も同時に行われました。前期に全ての学生実験と卒業研究を、後期には講義のみに組み替えました。一番の被害者は当時の工業化学科の5年生でした。工業化学科5年生には夏休みになってからも卒業研究を続けてもらい、もちろん、学寮も化学の卒研生だけに使用をお願いしました。さらに卒研生には夏の終わりの暑い中、多量の器具、装置、薬品から書物にいたるまで全て物品の搬出を助けていただきました。工業化学科棟にあった5年の教室も改修中だったので、5年生は青峰会館2階をクラスルームとし、私たち化学科教職員の半数以上がその隣で職員室生活を送りました。さらに改修後には移動した物品等の搬入の協力をお願いしましたが、しかしながら彼らは新しい

教室や新しい実験室に入ることなく卒業しました。今になって考えると、懐かしく思い出すと同時に、みんなよく協力してくれたものだと感じています。改めて当時の卒業生・修了生にお礼を申し上げます。

学科名のほかの予想外のことは核磁気共鳴装置の件です。赴任当時本学科には60MHzの装置がありました。天然物関連の合成に携わっていた関係から200MHz以上の装置で測定しないと解析できないので、週末には試料を持って名古屋に通いました。そのようなとき、平成5年度の先端設備申請に、本学科から核磁気共鳴装置を要求できる機会がありました。認められないだろうと期待せず、当時どの高専も持っていない、大学でもルーチンには使っていない非常に高額な400MHzの装置を申請したところ、驚くことに認められ、現在も化学科にとって必須の装置として元気に活躍しています。後から考えると、そこには定価を間違っていたりかなり低価格で申請したため認められたのかもしれないという背景がありました。

本校に赴任後のアルバムを開くと最初のページに体育祭で私が顔を真っ白にして走っている写真、2ページ後には初めて担任したクラスの体育祭で女子学生との3人4脚競争の写真、第3学年での1泊2日の研修旅行の写真などがあり、障害物競走で片栗粉の中の飴玉を手を使わずに口だけで探したことや3人4脚競争では転びながらも一生懸命に走ったことを思い出しました。

また、多少経験があったことから、平成6年に学生の求めでゴルフ同好会の顧問になりました。週1回の活動でしたが金曜日の5時過ぎには近くにあるゴルフ練習場の2階は本校学生で貸しきり状態でした。一般の利用者の少ない時間帯はクラブの貸出と打玉無制限千円で練習できたと思います。この同好会も私の年と反比例してだんだんとメンバーが少なくなり、19年度を最後に閉じてしまいました。

このように学生とのクラス活動や同好会活動、そのほか夜遅くまで頑張った勉強会、卒業研究など、学生のおかげで楽しい日々を過ごさせてもらったことに感謝しています。

最後に、お世話になりました鈴鹿高専の益々の発展と学生・教職員の皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

定年退職を前にして思うこと

電気電子工学科
鈴木昭二



昭和40年3月、工業高校を卒業して、名古屋大学空電研究所（現在は太陽地球環境研究所および国立天文台に改組吸収合併）に就職して以来、技術職員、エレクトーン調律師（セールスマン）、事務職員、教員を経験して45年が経過しました。この間、私は実に多くの人々に助けられてきました。感謝の気持ちでいっぱいです。困ったとき、親身になって相談にのってくれた人、人生の方向づけなど重要なアドバイスをしてくれた人は決まって同じ困難に直面した経験のある人でした。これまでに私が若いころ助けられた多くの方々の中から数人を紹介することで、今この鈴風を読んでいる方、特に若い人にとって、人と人との出会いの大切さを知るうえでの参考にしていただければ幸いです。

最初は、アルバイトとして空電研究所に就職し、苦しい下積み生活を経験されたあと、最後は事務官として名古屋大学の事務部長にまで昇りつめられたAさんのお話です。Aさんは優しい人で、当時定員削減の対象になっていた立場の弱い用務員さんたちのために親身になって相談にのってあげていました。私が国家公務員初級試験（行政事務一般）に合格して、空電研究所で面接試験を受けたときAさんは事務長さんでした。話をしているうちに、Aさんが言われるのには、君は私の経験から事務職員より技術職員に向いていると思うので、採用試験の種類とは異なるが技官として採用すると言っていただきました。工業高校の電気科を卒業した私自身も密かにそれを期待していました。そのおかげで、多くの優秀な先輩の技官から現場でしか経験できない回路技術のノウハウを数多く教えていただきました。しばらくたって一人の優秀な30歳代なかばの先輩から、鈴木君、年をとって身動きがとれなくなる前にここを辞めなさいと言われました。彼は、この職場では努力が報われないので、努力が報われる職場でそのような職種に就きなさいと言うのです。確かにその当時は技術職員の組織化もなく、事務官とは異なり上位のポストもありませんでした。昇格の道は閉ざされていました。給料はそこそこ上がっていくのですが、技官が一生懸命設計製作した観測機器で苦勞して観測データを出しても、そのデータを利用して論文を書き昇格していくのは教官だけでした。まもなく、辞めなさいと言った彼自身も研究所を退職しました。私も長い間辞めようかと迷いました。結局、私はAさんの後押しもあって4年と1ヶ月で空電研究所を辞めました。

退職した私は、夜間大学に行こうと思いましたが、その前に一時でも自分の本当に好きな音楽関係の仕事をしてみようかと決心しました。ピアノの調律師に

あこがれていましたが、当時はピアノの調律師学校に年齢制限があり、入学できませんでした。そこで、ヤマハのエレクトーン調律師短期養成コースに入学しました。資格を取って名古屋市内の楽器店に出向社員として勤務しました。当時はエレクトーン調律師の仕事があまりなかったので、実際には調律師兼セールスマンとして活動を開始しました。そこで二人目に紹介したい人物のBさんに出会ったのです。Bさんはセールスマンが読むための専門誌によく紹介された日本一のセールスマンとして名高い人でした。高額の契約金で、別の業界の大手の会社から引き抜かれて来た人です。Bさんは長年勤めた公務員（事務職）から転職してきたと言っていました。この人が営業課長として私たちの指導にあたりました。Bさんは大変魅力的な方で、実際に飛び込みセールスを行い、お客様から感謝されながら売る姿を何度も見せていただきました。彼はいつも、商品を売るのではなく、真にお客様の側に立って考える誠実さ、真剣さそのものを売ると言っていました。また、このような考え方はどのような職業に就いても同じで、どこでも通用するとも言っていました。彼の言葉からは人の心を揺り動かす不思議な力を感じました。私にはとても真似ができないとも思いました。楽器店では、夜間お客様の家に行くことが多く、夜間大学に行くには辞めるしかないと思いました。そのため、楽器店は1年足らずで辞めましたが、Bさんに会えたのはよい経験になりました。

ちょうどそのとき、人事院から名古屋工業大学（名工大）で、高卒中途採用で回路設計のできる人をさがしているとの情報を得ました。そこで直ぐ名工大で面接試験を受けました。募集を出した電子工学科の学科主任は私の履歴書を見て、若いうちから転職が多すぎるという理由で私の採用に反対でした。しかし、実際に回路技術者を必要としていた直接の上司となる予定のC先生の意見はまったく逆で、若くて経験豊富な人が欲しいと言われ、直ぐに採用が決まりました。この時期、事務手続きは厳しくなっており、昭和40年に合格した公務員試験が事務職であったため、私はしばらくの間事務職員として採用され勤務しました。採用されたあとでC先生は、鈴木君、実は僕も若いときは仕事を転々としていたんだよ、と笑いながら言われました。C先生はさらに、夜間大学を卒業して教員になることを目指しなさいとも言われました。先生ご自身の人生を私の将来に重ねるように人生設計図を描いて説明しながら私を激励してくださいました。その後、C先生は高専に転勤されましたが、転勤後もしばしば

名工大に來られて私を激励してくださいました。

C先生の後任として來られたD先生も人格者で、教授として配分されたご自身の研究費や出張旅費の大半を、すでに事務職員から技官に配置換えされていた私に援助してくださいました。また、D先生のご尽力で昭和50年には、夜間大学卒業を直前にした私を教務職員（教育職）に配置換えしてくださいました。このことにより、科研費の申請が教官と同様にできるようになりました。早速、奨励研究Aを申請し、採択されました。日常業務では、学生実験の指導はもとより、卒業研究の指導も任され、充実した年月を送りました。D先生のおかげで、この時期には多くの論文を出すことができ、日本中に研究者仲間ができました。

年月が経ち、D先生が定年退官されるときが来ました。後ろ盾を失った私は氷河期に入ることになりました。研究テーマも費用のかからない数学を中心とした理論研究にシフトしました。学会発表も年次休暇を取って自費で行きました。困った私は学位の取得を真剣に考えました。このときに助けてくれたのが、以前から現在まで30年以上にわたって共同研究をしている中部大学教授のE先生でした。E先生は片道2時間という遠距離を通勤されていたにもかかわらず、ほぼ毎日帰路の途中の午後8時頃名工大に來られて、私の研究や学位論文の書き方の指導をして下さいました。帰りは2人とも終電車になることもしばしばありました。E先生が言われるのに、先生ご自身も学位は論文博士で取得され大変苦勞されたとお聞きしました。

E先生のおかげで、昔学会で知り合った熊本大学工学部長のF先生から学位を出していただきました。F先生は退官後、熊本電波高専の校長になられたため、

私も25年間勤めた名工大から転勤し、熊本電波高専で助教授としてお礼奉公をすることになりました。当時最重要課題であった専攻科設置のための設立準備委員、ロボコンを強くするためのロボコン担当主事補、担任、学位を持たない先生方の研究支援など様々な仕事をしました。ロボコンチームは、私が担当主事補に就任した年は九州地区大会で準優勝し、2年目はAB両チームで優勝と準優勝を独占しました。2年連続で国技館での全国大会に出場し活躍しました。熊本電波高専は中学生の注目を浴び、受験生もかなり増加しました。一方、先生方も3年間で10名近くの方が学位を取得され、文部省（現文部科学省）のお役人を驚かせました。このような努力が実り、申請一年目で専攻科設置が決まりました。専攻科設置後、私は専攻主任、JABEE責任者など、複数の役職を持ちながら、できたての専攻科を軌道に乗せるため大変忙しい日々を送っていました。忙しさのあまり帰宅できず、教官室でうたた寝をただけで次の日の講義をしたこともしばしばありました。やがて校長先生が退官され、お礼奉公は無事終了しました。

実家のある愛知県の近くに転勤したいと捜していたところ、運良く鈴鹿高専に転勤することができました。鈴鹿高専の教職員の方々には皆さん親切で、高専の教員として15年間も勤めたのに最後まで初心者マークをはがせなかった私をいつも助けてくださいました。この場をお借りして厚くお礼申しあげます。学生さんにはいつも元気よく、中には「ショウジ頑張れよ！」などと言って励ましてくれる人もいました。このようにすばらしい高専で定年を迎えられるのは幸せです。

最後に、この45年間を振り返って、私は人生の重要な節目ごとに親切な人、優しい人に遭遇できたのは本当に幸運だったと思っています。



定年退職を迎えて

私はこの春、3月末で定年退職を迎えることになりました。鈴鹿高専・金属工学科（昭和61年度より現在の材料工学科に改組）に赴任してから授業、実習などを担当して今日に至り、41年が経過し、親子二代の受講生もいます。今、こうして、長い高専での教育研究生活を振り返ってみて、どれくらい役に立つことができたかなと思うと、内心忸怩たるものがあります。

赴任した昭和44年4月は創設4年目の金属工学科（鈴鹿高専創立は昭和37年で、金属工学科は昭和41年に創設された）であり、人的にも実験装置にもインフラの整備が進行中の教育研究環境でした。学生実験実習や卒業研究に関係する装置もまだ少なく、電気炉や実験装置などは皆さんの手を借りて自作しました。分析器具の組み立てなどによる装置がだんだん増え、実験室も次第に整っていきました。

学生の皆さんと最も親しく長く付き合えたのは卒業研究を通してでした。私の担当した卒業研究の主な分野・テーマは、社会の変化（時代の流れと要請）により時間的な経時変化で大きく3期に分類できます。初期は金属・鉱物資源の精錬や表面処理の電気化学的取り扱いに関する研究課題が中心でした。材料工学科に改組された（ファインセラミックスなどの新素材開発が話題であった）頃の中期は、高温高圧を用いた無機材料開発に関する課題の研究が中心でした。また、最近では情報通信の飛躍的発展もあり、マイクロウェーブを用いた材料開発・技術応用に関するテーマを中心に研

材料工学科 國枝義彦



究を進めてきました。企業からの支援もいただきながら研究を続けていますが、学生と一緒に作業し、議論し、新しい研究方向を打ち出して研究の面白さを味わうことができました。さらに学生の成長に感激する多くの機会を得ることもできました。

また、教育面では、授業のほか、体育行事での昭和47年に水泳プールが竣工されるまでの臨海水泳訓練・遠泳が白子の鼓が浦海岸で実施され日焼けしながら業務に当たったこと。学生会クラブ活動で、音楽部の顧問として、特に、昭和50年三重県国民体育大会・伊勢陸上競技場・開会式での音楽部バンド演奏、そのための事前練習で伊勢陸上競技場へまだ現在の23号線ができてなくて、交通渋滞の中毎週日曜日早朝学校からバスで通ったことなど。また、その後、バレーボール部および囲碁将棋部の顧問として高専体育大会、学生リーグ戦や各種選抜大会、種々の遠征に出かけ学生の皆さんと共に汗を流した時などの多くの思い出があります。

最後に、このような思い出を残しながら鈴鹿高専で過ごすことのできましたのも学生の皆さん、そして学校長をはじめ教職員の皆さんに恵まれ、その他関係各位の多くの皆様の支えあってのことと、改めて深く感謝申し上げます。

定年退職をむかえて

昭和40年4月に本校、電気工学科の技官として奉職して以来早45年の歳月が経ち、この3月末日をもって定年退職することになりました。人生の半分以上を本校で過ごさせて頂き、大過なく定年を迎えることができたのは皆様のお陰であると感謝しております。

私が採用されたときは、学校の新築工事(第3期)の最中、電気工学科棟が完成したときで、実験設備がほとんど整っておらず、教職員は授業と学生実験の準備に追われる毎日を夢中で過ごしたことがつい先日のように懐かしく思い出されます。昭和40年は一期生が4年生になった年で、高学年の学生実験機器がほとんど揃っていない状態で、実験器具を整えながら試行錯誤の状態ですべての学生実験の指導を行いました。今日のような電卓やパソコン・デジカメ・複写機・携帯電話・校内LANなどは存在せず、計算は計算尺とソロバン・電動計算機、写真はフィルムとスライド、コピーは湿式のリコピー(青焼きコピー)とクイックコピー(白黒反転

電気電子工学科 伊藤保之



コピー)、教職員間の連絡はすべてが電話と印刷物などでした。科学技術の進歩は、社会だけでなく教育の現場を大きく変貌させ、政権交代がなされ、まさに隔世の感がいたします。

また、無線部の顧問を昭和45年から20年間、柔道部の顧問と部長を17年間務めさせて頂いたこと、この45年間に接した卒研生とクラス担任をした学生および部活の学生など、多くの懐かしい思い出をこれからの日々の活力にしたいと考えています。

最後に、教職員の皆様のご指導とご援助、卒業生の激励などのお陰で勤め終えることができましたことは誠に有り難く感謝申し上げます。皆様方のご健勝と鈴鹿高専の益々の発展を心からお祈り申し上げて、お別れとさせていただきます。

定年という折り返し点

つい数年前までは、早く定年になって悠々自適の生活を夢見ていましたが、いざ、定年を目の前にしますと現実とはなかなか思うようにはいかないようで複雑な心境です。

鈴鹿高専に職を得て30余年、思い起こせば…、職場の中ではやはり同年代の方々とのおつきあいが多かったと思います。特にグラウンドなど運動施設が多くあり、私はテニスなら楽しめるところ、いきなり職員野球部に入れと言われました。入部以来ほぼ毎日練習があり部員数の影響で試合にも出場させてもらいましたが、何と言っても鼻息荒い先輩や同僚が多くてこわいところでした。高校や大学時代のクラブ活動と変わらないほどの厳しさでしたが、それでも仕事仲間ということで共に酒を飲んで楽しみ、充実した毎日であったとなつかしく思います。

肝心の仕事では、最初に図書館に約10年間勤めさせて頂き、その間に図書館司書資格を取得しました。そして当時16ビットパーソナルコンピュータが発売され図書館に設置されたことにより、情報処理教育センターの方を始め多くの教職員の方の協力を得てベーシックプログラムを組んで図書館システ

学生課課長補佐 大谷佳範



ムを構築しました。貸出・返却をバーコードで処理できたことが画期的なことでした。現在は外注のシステムが稼働していますが、その仕様のいくつかは今も当時のものが引き継がれています。

会計課に異動した後も事務用電算機でコボルプログラムによる給与処理などを担当させて頂きましたが、ウィンドウズの出現によりプログラム作成の時代はあっけなく終わりました。

庶務課では、40周年記念事業、専攻科審査や全国教育教員研究会なども担当させて頂き、対外的な仕事に右往左往していました。

学生課にもどり、学校はサービス業と言われ、学生・保護者には親切でいねいに対応することが求められる時代になったと思います。

これまでたくさんの方のご指導や暖かい支援をいただいたおかげで、ここまでやってこられたことに感謝いたします。ありがとうございました。

退職後も、再雇用として限られた時間ではありますが本校にお世話になる予定であり、皆様の一助になるよう勤めたいと考えています。

転出教員

山陰の地からの近況報告

副校長・電子情報工学科 齊藤正美 (43M卒)

昭和43年機械工学科卒の私たちのクラスは、約2年前(平成20年3月)に卒業40周年と還暦を記念してクラス会を開催し、母校訪問、元担任(野村武先生)による「思い出の授業」の実施、記念植樹、盛大な懇親会(つまり酒盛り)等を行いました。植樹した木は立派な形をした羅漢榎(らかんまき)で、学校の正門に入ってすぐの芝生広場の一角に植えました。ところが、この木が1年も立たないうちに枯れ始め、とうとう再起不能となってしまいました。大事なモニュメントの消失を恐れた私たちは、ほぼ同じ大きさや形をした新しい榎の木を再び同じ場所に植えました。そのあと、同じ悲劇を繰り返さないため、世話をさせていただいた植木屋さんに定期的に診断に来てもらうとともに、鈴鹿高専に勤めていた私が榎守(?)となり、平均週一回の水やりを続けていま



平成20年3月に43Mクラス会が植樹した羅漢榎の二世(43M森田氏撮影)

した。その甲斐があつて、その木は写真のように立派に根付いてくれたようです。

が、今年に入ってから、その榎守の任務を続けなければならない最中の私に異動の話が出てきました。つまり、定年(63歳)まであと一年を残して鈴鹿高専を離れ、この四月に鳥取県にある米子高専に校長として勤めるこ

ととなってしまったという次第です。榎の木のことも2歳の孫のことも心配でしたが、本社(高専機構)の命でもあり承諾しました。この地であと何年勤めるのかはわかりませんが、よもや還暦を過ぎてから単身赴任を初体験するとは考えてもいませんでした。新しい勤務先では、慣れない仕事や見知らぬ人たちとのおつきあいの連続で多少とも緊張を強いられませんが、帰宅して話ができる相手もいません。また、あたりまえですが、買い物や食事の支度、洗濯、ゴミ出しなどもすべて一人でやらなければなりません。しかし、人間やる気になればやれるものだという気がします。定年退職後はとくに生き甲斐や他人との交流が必要だといわれています。つまり、何もしないとぼけてしまうよとされていますが、そのとおりだと思います。したがって、この年齢で新しい仕事をさせてもらえること自体がたいへん幸せなことと考えなくてはなりません。また、連れ合いとはいつまでも一緒におれるわけでもなく、もしかしたら、自分ひとりで暮らしていかなければならないときが来るかもしれません。そう思えば、今の単身赴任生活も貴重な経験ではないかと思えます。

何だかせつない話になってしまいましたが、これを機に、新しい赴任地で、改めて高専を取り巻く諸状況、教育制度、高専教育の良さなどを考え直し、米子高専と全国高専の一層の発展に努めたいと考えています。「学生が生き生きしている学校」「地域・社会から信頼される学校」「教職員が働きがいのある学校」をキャッチフレーズとして新しい学校での仕事を始めています。この山陰の地から、鈴鹿高専のすべての同窓生のご活躍を祈っています。

転出のご挨拶

生物応用化学科 岩田政司 (50C卒)

青峰同窓会の皆さまにはご健勝にお越しのことと存じます。私は、平成5年4月より17年の長きにわたり母校鈴鹿高専に勤務しておりましたが、本年

(平成22年)3月母校を離れ、現在、大阪府立大学で教鞭をとっております。鈴鹿高専に在職中は多くの教職員の皆さまや青峰同窓会の皆さまの温かいご支援

をいただき、つつがなく職務を全うできましたことを、青峰同窓会報の場をお借りして、心よりお礼申し上げます。

鈴鹿高専では、専門の化学工学系科目をはじめ、環境系科目、情報系科目、統計力学、機械系科目などの科目を担当させていただきました。これらの科目は、化学を専門とする学生諸君にとって、数式が多数登場する難解で苦手な科目であったかと思えます。科目の内容やレベルを落とすことなく、如何に分かりやすく教えるかということについていつも考えて授業に臨んでおりましたが、1回の授業で教室の学生全員に理解してもらうことはなかなかできませんでした。しかし、放課後や休日、教員室に質問に来てくれる熱心な学生達が、手を交え品を変えた私の説明に「分かった!」と反応してくれる時は、教員としての幸せを感じる瞬間でもありました。現在の私の教員としての技量が赴任当初より多少なりとも上がっているとすれば、それは、熱心に質問に来てくれた多くの学生諸君のお陰であると感謝しております。

平成12年頃より、外部評価・JABEE等の仕事に携わることになり、学校全体の種々な活動に視野を広げることが出来ました。一緒に仕事を進めていただいた教職員の皆さまにも心よりお礼を申し上げます。

縁あって、大阪府立大学大学院工学研究科化学工学分野に籍を移すことになり、はや3カ月が過ぎました。写真の正面の建物の3Fに私の研究室、1Fに教室があります。学部生と大学院生を相手に自分の専門領域そのものを教えることができる幸せな環境ですが、高専出身の教員ならではのよい授業を行うため、毎日その準備に追われています。もう一つの写真は、学部

2年生の「移動速度論I」の授業風景です。皆熱心に授業を聴いてくれていますが、彼らとの間に、鈴鹿高専における学生と教員のような親しい関係が築けたらと思っております。一方、自らの研究室の整備と研究を通じた地域社会への貢献には少し時間がかかりそうです。しかし、焦らずに努力を続けたいと思います。

大阪の地より、鈴鹿高専と青峰同窓会の皆さまのますますのご発展をお祈りいたしております。

(平成22年七夕の夜 阪府大B5棟3F 資源工学グループ教室にて)



ありがとうございました

教養教育科 齊藤園子

このたび鈴鹿高専を離れ、4月から北九州市立大学外国語学部へ赴任しました。在職中は皆様大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。温かく熱心な教職員の方々、明るく元気で勉強に部活にやる気にあふれた学生のみなさんから、多くを学んだ日々でした。こちらで新任の私はまだ慣れないことも多く、勉強の毎日です。鈴鹿高専で得たことを生かしながら、教育研究においてより良い貢献ができるよう努力していきたいと思っています。

北九州市立大学では、6千人余りの学生が複数のキャンパスで学業に励んでいます。外国語学部がある北方キャンパスは、九州の玄関口小倉駅からモノレールで10分程度のところにあり、近くには北九州

高専もあります。三重県からは遠くなりましたが、皆様のご活躍と鈴鹿高専のますますのご発展をこころからお祈りいたしております。



北九州市立大学

長瀬先生の訃報に接して



去年物理の大矢先生の訃報をお伝えしたばかりなのに、またしても鈴鹿高専にとって重鎮中の重鎮、最も鈴鹿高専を愛し、鈴鹿高専と共に歩んでこられた方を失いました。悔しくて、惜しくて、残念でなりません。

長瀬先生は、9月10日午前0時02分、急性咽頭蓋炎という病名で息を引き取られました。享年67歳でした。のどが苦しくなり、呼吸困難に陥り救急車で病院に運ばれました。延命治療すれば7-8年の余命は予想できましたが、生前延命治療拒否されていたこともあって、その時間に息を引き取られたそうです。ご家族の方だけでなく我々の誰一人として、そのような病魔が突然襲うことを予想しておらず、悲しさといえ言葉では言い尽くせません。先生は、定年後4年間非常勤講師として、主に高学年の応用数学を担当され、週3日学校にお越しになり、毎日というくらいお顔を拝見していました。少しお痩せになったかなとは感じて、そのような病気になるとは信じられませんでした。

先生は、昭和42年、私が工業化学科3年生の時に鈴鹿高専数学科の講師として赴任されました。種々の要職を努められ、またクラブ活動(野球部)、学生指導に卓越したお手本をお示しになりました。勝田先生が寮務主事時代の寮務主事補として、寮生全員から一目置かれる先生でした。その後、平成5年には学生主事になりました。当時は全寮制も最後の頃で問題は山積でしたが、淡々と職務をこなされる姿は、見事というよりも超人的能力を感じました。6年間の長きに亘って勤められた学生主事引退後は、一転して仏の長瀬ではありませんが、学生相談室室長になりました。高専に学生相談室を設置し、開店するという一番大変なときに相談室を立ち上げ、あの厳しかった先生は何処へ行かれたのかと疑うほどでした。その後は、数学教室の室長と一般学科の科長を長く勤められました。ひっきりなしに進学を希望する学生が質問に来るのに対しても、時間を惜しまず丁寧に対応されていた



た姿を今も思い出します。

何といても、野球部の部長・顧問として、学生と一緒に練習を指導されていた姿は、何処にそのような力があるのかと思いました。シートノックはもちろんのこと、まだこの夏休みに、バッティングピッチャーをなされていました。先生が部屋にみえないときは、野球場に行けば会えるというほど、野球を愛されていました。告別式にも、あれほど多くの野球部関係者が訪れていたのには驚きました。棺の中には、先生が使っていた帽子、アンダーシャツ、グローブの他、在職中、東海大会で最後に優勝したときのウイニングボールや退職時に野球部の在校生が寄せ書きをしたバットなど、まるでプロの野球人かと思わせる品々が収められました。

研究面では、主に「関数解析的な手法を用いた偏微分方程式等の解のさまざまな性質についての研究」に従事されました。国内の数学の研究誌では最も権威のある Nagoya Mathematical Journal に3本の論文が掲載され、その方面の方々からは高く評価されていました。長瀬先生は野球で言う走攻守の、教育、研究、学生指導の3拍子、更に学校要職も完璧にこなされ4拍子揃った教師の鏡でした。

ご冥福をお祈りします。未永く鈴鹿高専の行く末をお見守りください。

教養教育科 奥 貞二(45C卒)

平成21年度会計報告

| 収入の部 | |
|-------------------|------------|
| 摘要 | 金額(円) |
| 平成20年度からの繰越金 | 45,698,295 |
| 平成21年新入会費(210+2名) | 2,332,000 |
| 預金利息 | 95,568 |
| 合計 | 48,125,863 |

| 支出の部 | |
|---------|------------|
| 摘要 | 金額(円) |
| 会報発行経費 | 829,955 |
| 事務費 | 169,611 |
| 次年度へ繰越金 | 47,126,297 |
| 合計 | 48,125,863 |

編集後記

北村 登(47E卒)

今年の夏は気象関係者も「異常気象」と認めるほどの暑さでしたが、社会全体に「異常」と思われることがいろいろと起こっています。これらのことがストレスとなり、ますます異常の度合いが大きくなっていくような気がします。電気電子工学科棟は耐震改修工事が終わり生まれ変わりましたが、高専も再来年で50年となり制度面でのストレスが現れてくるのが考えられます。ストレスも悪いことばかりでなく、それを内蔵しているものが生まれ変わるためのトリガーとして役立てれば、むしろ良い作用をすることになります。ストレスがどのように動くかは、それを持つ組織なりが正常に機能しているにかかっていると思います。そのためには、組織本体だけでなくサポートする組織のあり方も非常に重要です。その意味では青峰同窓会のあり方が、これからの鈴鹿高専のあり方に非常に大きく係わることになります。この会報がその役割をほんの少しでも果たしていることを願っています。

誌名
青峰同窓会会報

発行日
2010年10月

発行
国立鈴鹿工業高等専門学校
青峰同窓会 広報委員会
〒510-0294 鈴鹿市白子町
☎ 059-386-1031
E-mail : almn@suzuka-ct.ac.jp

ホームページアドレス

<http://www.suzuka-ct.ac.jp/~almn/>